

公共野球・ソフトボール場の利用者数増減に関する研究

A study for fluctuation of users for baseball park

1J02C134-0 氏名鈴木 尚理

指導教員 主査 間野義之 先生 副査 木村和彦 先生

【研究動機・目的】

プロ野球の再編問題や、プロ野球巨人戦の視聴率低下等、日本プロ野球の明るい話題を聞かなくなった。一方で、今年の夏の甲子園での熱闘や、アメリカメジャーリーグでの日本人選手の活躍、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)での全日本チームの優勝など、野球の醍醐味、魅力を伝えるに十分な明るい話題もある。筆者自身は、幼いころから、野球に興味を持ち、近所の公園などで野球を行っていた。しかし、最近では球技を禁止している公園をよく見かける。このことは、子供たちから野球のみならず、サッカーやバスケットボールの実施機会を奪ってしまいかねない。日常生活の中で、スポーツを実施できる場を確保するためにも、公共スポーツ施設のはたす役割は重要だろう。公共スポーツ施設は、これから少子高齢化社会を迎える日本において、社会的な課題である健康維持、健康増進にも効果がある。そこで本研究では、公共野球・ソフトボール場の利用者数増減に関わる施設周辺人口の要因を調査、分析し、今後のあり方を検討することを目的とする。

【研究方法】

(財)日本体育施設協会館員名簿(平成16年度)に記載の全施設(15068)を調査対象としたWEB調査(回収数3391施設、回収率22.5%、回答数2301施設)を統計パッケージソフトウェア(SPSS 13.0J for Windows)を用いて統計学的に分析し、施設利用者数と施設周辺人口に相関関係、因果関係があるのかを研究した。

【分析結果】

公共野球・ソフトボール場の利用者数の増減と施設周辺人口の相関関係、因果関係を分析した結果、因果関係は見られなかった。また、分析した全7項目(人口総数、昼間人口、男性総人口、成人男性人口、未成年男性人口、女性総人口、高齢者人口)で中程度の相関関係が見られた。

【考察】

公共野球場・ソフトボール場利用者数と周辺人口の間にはなんらかの関係があると思われたが、証明することは出来なかった。関係が見られなかった理由として、次の2つの仮説が考えられる。1つは、施設利用者の大半が団体利用者であり、自分の意思で使用する施設を選択するのではなく、チームの意思や都合で使用する施設が決まっている。その結果、チームの中には、自宅から遠い施設を利用する

ことを余儀なくされる人が発生する場合が考えられる。2つ目の理由は、施設利用者に偏りが無いということだ。男女ともに全ての年代、条件の違った人々がバランスよく施設利用しているということだ。

また、女性人口の分析においても、他の分析と大きな差はなく、1%水準で有意を示した。女性が野球場、ソフトボール場を利用するイメージは、ないが女性の人口数は男性の人口数と相関があるためだと思われる。実際に分析を行うと有意確率.999と非常に高い相関関係が見られた。

また、高齢者人口と総利用者数の間にも、分析の結果、1%水準で有意を示した。「生涯スポーツ」が推奨される中で、高齢者の運動実施率が上がり、野球・スポーツ場に足を運ぶ回数が増えたとも考えることも出来る。実際に、高齢者のスポーツ実施率は増加しており、1994年には、過去1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった割合が、60歳代で63.5%、70歳代で71.8%だったが、2004年には、60歳代が32.5%、70歳代で44.8%にまで、減少している。(スポーツ白書より)この10年での変化は劇的であり、わが国の生活習慣の変化をうかがえる。高齢者が、野球やソフトボールを行っているとは、考えにくいですが、散歩の寄り道で、球場に立ち寄っている可能性も考えられる。

【まとめ】

公共野球・ソフトボール場の主な利用客は団体利用客である。しかし、世の中には、どこのチームにも団体にも属さないが、野球、ソフトボールをやりたい人がいると思う。そういう人たちのためにも、個人参加の時間を設ける等して、個人単位でも楽しめる空間作りも必要かと思う。